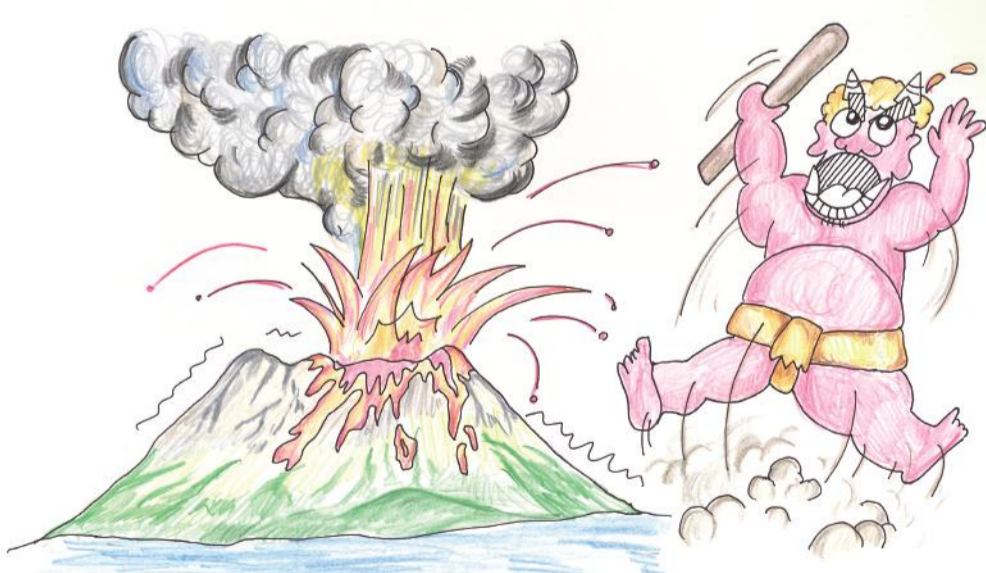
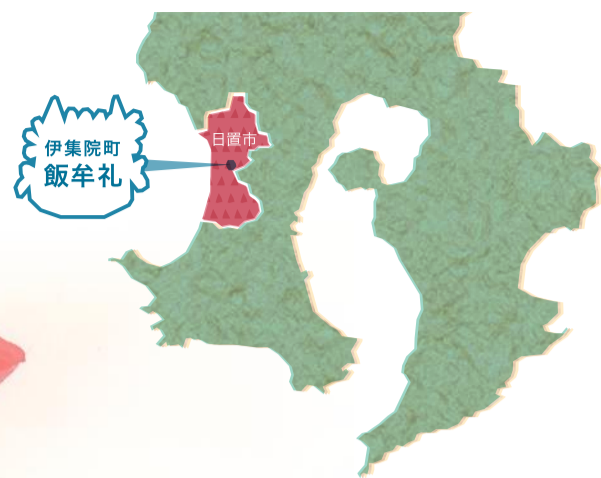


飯牟礼地区案内図



かしむかし、飯牟礼に大きな鬼が住んでいました。大鬼が立ち上がると、頭は雲まで届き、大鬼のいびきは、雷のようにゴロゴロと響きました。大鬼は力持ちだったので、いつも村の人々に自慢ばかりしていました。村の人たちも大鬼の力自慢にかなう人はいませんでした。力仕事になると「大鬼さん、お願いしますよ」と、いつも頼んでいました。大鬼は村の人から仕事を頼まれると、いつも喜んで気前よく手伝ってくれました。

ある日、この山くわで、いたずらつづきを起した大鬼が村の人達に言いました。「吾輩が飯牟礼山と桜島とどちらが重いか、今から持ちあげてみせるぞい」と、足をどっしんどっしんとさせ、腕をぶるぶるんと鳴らしました。村の人たちはみんなびびりしました。いくら大鬼が力自慢でも飯牟礼山と桜島を持ちあげることなんか無理だと思ったからです。村の人々が「大鬼どん、無茶なことしなさんな」と止めると、なお意地になって、「持ち上げてみせるわい」と大張り切りです。どうとう村の人たちも負けてしまいました。そこで村の人たちは遠くの方にみんな集まって、大鬼の力自慢を見物することになりました。

その日は村中大騒ぎでした。年寄りも子どもも、みんなわいわいがやがやです。大鬼は大きな「山おこ」を持って来て、桜島と飯牟礼山を担いました。大鬼は腰をかがめて一度、二度大きく深呼吸をしました。「うんとこ、こいしよ」二つの大きな山を持ちあげにかかりました。ところがどうでしょう。桜島は海の中に浮かんでいた山です。持ちあがりませんが、飯牟礼山の方はどうしても持ちあがりません。「うーん、うーん」何度も力を入れて足を踏ん張りましたが、どうしても持ちあがりません。顔は真っ赤、体中から汗が流れましたが、何んやっても持ちあがりません。

大鬼は村人の前で恥をかいたと怒ってしまいました。そうして「山おこ」で飯牟礼山を力いっぱい叩きました。すると飯牟礼山は二つに割れて「矢筈岳」と「諸正岳」に分かれてしまいました。その時に大鬼が踏ん張った足跡に水が溜まり大きな池になりました。村の人々は「この二つの池に「上池」「下池」という名前をつけました。また、恋之原や古城にも大鬼の足跡に水が溜まり田んぼになりました。大鬼は今度こそと桜島と矢筈岳を担いました。ところが、今度は桜島が重かったのです。どうしても釣り合いが取れず、うまく担うことができません。大鬼はまたぶりぶり怒って、今度は桜島の頭をポカーンと叩きました。その時「ズズズ、ドカーン」というものすごい音がしました。大鬼や村人が、我に返って桜島の方を見ると、それまで静かだった桜島が、真っ赤な火柱と黒煙を吹き上げているのです。この時以来、桜島は毎日のように火を噴いたり煙や灰を吹き上げたりするように変わったのだそうです。

さて、この山くわで大鬼の歩きまわった足跡は、田や畑になりました。今まで荒れ果てていたところもきれいになりました。今の恋之原のあたりは、その時大鬼が踏み固めたところと言われています。こうして大鬼の力自慢の山くわは失敗に終わってしまいました。

山くわが終わったあと、いつの間にか飯牟礼から大鬼はいなくなっていました。村の人たちに噂が広がりました。桜島の爆発に驚いたからでしょう。しかし、飯牟礼はそれから田畑がきれいになり、いろいろな作物がたくさんとれるようになりました。村人は大鬼に感謝しながら、楽しく豊かにすごしたそうです。

「飯牟礼山の大鬼」

かしむかし、飯牟礼に大きな鬼が住んでいました。大鬼が立ち上がると、頭は雲まで届き、大鬼のいびきは、雷のようにゴロゴロと響きました。大鬼は力持ちだったので、いつも村の人々に自慢ばかりしていました。村の人たちも大鬼の力自慢にかなう人はいませんでした。力仕事になると「大鬼さん、お願いしますよ」と、いつも頼んでいました。大鬼は村の人から仕事を頼まれると、いつも喜んで気前よく手伝ってくれました。

ある日、この山くわで、いたずらつづきを起した大鬼が村の人達に言いました。「吾輩が飯牟礼山と桜島とどちらが重いか、今から持ちあげてみせるぞい」と、足をどっしんどっしんとさせ、腕をぶるぶるんと鳴らしました。村の人たちはみんなびびりしました。いくら大鬼が力自慢でも飯牟礼山と桜島を持ちあげることなんか無理だと思ったからです。村の人々が「大鬼どん、無茶なことしなさんな」と止めると、なお意地になって、「持ち上げてみせるわい」と大張り切りです。どうとう村の人たちも負けてしまいました。そこで村の人たちは遠くの方にみんな集まって、大鬼の力自慢を見物することになりました。

その日は村中大騒ぎでした。年寄りも子どもも、みんなわいわいがやがやです。大鬼は大きな「山おこ」を持って来て、桜島と飯牟礼山を担いました。大鬼は腰をかがめて一度、二度大きく深呼吸をしました。「うんとこ、こいしよ」二つの大きな山を持ちあげにかかりました。ところがどうでしょう。桜島は海の中に浮かんでいた山です。持ちあがりませんが、飯牟礼山の方はどうしても持ちあがりません。「うーん、うーん」何度も力を入れて足を踏ん張りましたが、どうしても持ちあがりません。顔は真っ赤、体中から汗が流れましたが、何んやっても持ちあがりません。

大鬼は村人の前で恥をかいたと怒ってしまいました。そうして「山おこ」で飯牟礼山を力いっぱい叩きました。すると飯牟礼山は二つに割れて「矢筈岳」と「諸正岳」に分かれてしまいました。その時に大鬼が踏ん張った足跡に水が溜まり大きな池になりました。村の人々は「この二つの池に「上池」「下池」という名前をつけました。また、恋之原や古城にも大鬼の足跡に水が溜まり田んぼになりました。大鬼は今度こそと桜島と矢筈岳を担いました。ところが、今度は桜島が重かったのです。どうしても釣り合いが取れず、うまく担うことができません。大鬼はまたぶりぶり怒って、今度は桜島の頭をポカーンと叩きました。その時「ズズズ、ドカーン」というものすごい音がしました。大鬼や村人が、我に返って桜島の方を見ると、それまで静かだった桜島が、真っ赤な火柱と黒煙を吹き上げているのです。この時以来、桜島は毎日のように火を噴いたり煙や灰を吹き上げたりするように変わったのだそうです。

さて、この山くわで大鬼の歩きまわった足跡は、田や畑になりました。今まで荒れ果てていたところもきれいになりました。今の恋之原のあたりは、その時大鬼が踏み固めたところと言われています。こうして大鬼の力自慢の山くわは失敗に終わってしまいました。

山くわが終わったあと、いつの間にか飯牟礼から大鬼はいなくなっていました。村の人たちに噂が広がりました。桜島の爆発に驚いたからでしょう。しかし、飯牟礼はそれから田畑がきれいになり、いろいろな作物がたくさんとれるようになりました。村人は大鬼に感謝しながら、楽しく豊かにすごしたそうです。

かしむかし、飯牟礼に大きな鬼が住んでいました。大鬼が立ち上がると、頭は雲まで届き、大鬼のいびきは、雷のようにゴロゴロと響きました。大鬼は力持ちだったので、いつも村の人々に自慢ばかりしていました。村の人たちも大鬼の力自慢にかなう人はいませんでした。力仕事になると「大鬼さん、お願いしますよ」と、いつも頼んでいました。大鬼は村の人から仕事を頼まれると、いつも喜んで気前よく手伝ってくれました。

ある日、この山くわで、いたずらつづきを起した大鬼が村の人達に言いました。「吾輩が飯牟礼山と桜島とどちらが重いか、今から持ちあげてみせるぞい」と、足をどっしんどっしんとさせ、腕をぶるぶるんと鳴らしました。村の人たちはみんなびびりしました。いくら大鬼が力自慢でも飯牟礼山と桜島を持ちあげることなんか無理だと思ったからです。村の人々が「大鬼どん、無茶なことしなさんな」と止めると、なお意地になって、「持ち上げてみせるわい」と大張り切りです。どうとう村の人たちも負けてしまいました。そこで村の人たちは遠くの方にみんな集まって、大鬼の力自慢を見物することになりました。

その日は村中大騒ぎでした。年寄りも子どもも、みんなわいわいがやがやです。大鬼は大きな「山おこ」を持って来て、桜島と飯牟礼山を担いました。大鬼は腰をかがめて一度、二度大きく深呼吸をしました。「うんとこ、こいしよ」二つの大きな山を持ちあげにかかりました。ところがどうでしょう。桜島は海の中に浮かんでいた山です。持ちあがりませんが、飯牟礼山の方はどうしても持ちあがりません。「うーん、うーん」何度も力を入れて足を踏ん張りましたが、どうしても持ちあがりません。顔は真っ赤、体中から汗が流れましたが、何んやっても持ちあがりません。

大鬼は村人の前で恥をかいたと怒ってしまいました。そうして「山おこ」で飯牟礼山を力いっぱい叩きました。すると飯牟礼山は二つに割れて「矢筈岳」と「諸正岳」に分かれてしまいました。その時に大鬼が踏ん張った足跡に水が溜まり大きな池になりました。村の人々は「この二つの池に「上池」「下池」という名前をつけました。また、恋之原や古城にも大鬼の足跡に水が溜まり田んぼになりました。大鬼は今度こそと桜島と矢筈岳を担いました。ところが、今度は桜島が重かったのです。どうしても釣り合いが取れず、うまく担うことができません。大鬼はまたぶりぶり怒って、今度は桜島の頭をポカーンと叩きました。その時「ズズズ、ドカーン」というものすごい音がしました。大鬼や村人が、我に返って桜島の方を見ると、それまで静かだった桜島が、真っ赤な火柱と黒煙を吹き上げているのです。この時以来、桜島は毎日のように火を噴いたり煙や灰を吹き上げたりするように変わったのだそうです。

さて、この山くわで大鬼の歩きまわった足跡は、田や畑になりました。今まで荒れ果てていたところもきれいになりました。今の恋之原のあたりは、その時大鬼が踏み固めたところと言われています。こうして大鬼の力自慢の山くわは失敗に終わってしまいました。

山くわが終わったあと、いつの間にか飯牟礼から大鬼はいなくなっていました。村の人たちに噂が広がりました。桜島の爆発に驚いたからでしょう。しかし、飯牟礼はそれから田畑がきれいになり、いろいろな作物がたくさんとれるようになりました。村人は大鬼に感謝しながら、楽しく豊かにすごしたそうです。

かしむかし、飯牟礼に大きな鬼が住んでいました。大鬼が立ち上がると、頭は雲まで届き、大鬼のいびきは、雷のようにゴロゴロと響きました。大鬼は力持ちだったので、いつも村の人々に自慢ばかりしていました。村の人たちも大鬼の力自慢にかなう人はいませんでした。力仕事になると「大鬼さん、お願いしますよ」と、いつも頼んでいました。大鬼は村の人から仕事を頼まれると、いつも喜んで気前よく手伝ってくれました。

ある日、この山くわで、いたずらつづきを起した大鬼が村の人達に言いました。「吾輩が飯牟礼山と桜島とどちらが重いか、今から持ちあげてみせるぞい」と、足をどっしんどっしんとさせ、腕をぶるぶるんと鳴らしました。村の人たちはみんなびびりしました。いくら大鬼が力自慢でも飯牟礼山と桜島を持ちあげることなんか無理だと思ったからです。村の人々が「大鬼どん、無茶なことしなさんな」と止めると、なお意地になって、「持ち上げてみせるわい」と大張り切りです。どうとう村の人たちも負けてしまいました。そこで村の人たちは遠くの方にみんな集まって、大鬼の力自慢を見物することになりました。

その日は村中大騒ぎでした。年寄りも子どもも、みんなわいわいがやがやです。大鬼は大きな「山おこ」を持って来て、桜島と飯牟礼山を担いました。大鬼は腰をかがめて一度、二度大きく深呼吸をしました。「うんとこ、こいしよ」二つの大きな山を持ちあげにかかりました。ところがどうでしょう。桜島は海の中に浮かんでいた山です。持ちあがりませんが、飯牟礼山の方はどうしても持ちあがりません。「うーん、うーん」何度も力を入れて足を踏ん張りましたが、どうしても持ちあがりません。顔は真っ赤、体中から汗が流れましたが、何んやっても持ちあがりません。

大鬼は村人の前で恥をかいたと怒ってしまいました。そうして「山おこ」で飯牟礼山を力いっぱい叩きました。すると飯牟礼山は二つに割れて「矢筈岳」と「諸正岳」に分かれてしまいました。その時に大鬼が踏ん張った足跡に水が溜まり大きな池になりました。村の人々は「この二つの池に「上池」「下池」という名前をつけました。また、恋之原や古城にも大鬼の足跡に水が溜まり田んぼになりました。大鬼は今度こそと桜島と矢筈岳を担いました。ところが、今度は桜島が重かったのです。どうしても釣り合いが取れず、うまく担うことができません。大鬼はまたぶりぶり怒って、今度は桜島の頭をポカーンと叩きました。その時「ズズズ、ドカーン」というものすごい音がしました。大鬼や村人が、我に返って桜島の方を見ると、それまで静かだった桜島が、真っ赤な火柱と黒煙を吹き上げているのです。この時以来、桜島は毎日のように火を噴いたり煙や灰を吹き上げたりするように変わったのだそうです。

さて、この山くわで大鬼の歩きまわった足跡は、田や畑になりました。今まで荒れ果てていたところもきれいになりました。今の恋之原のあたりは、その時大鬼が踏み固めたところと言われています。こうして大鬼の力自慢の山くわは失敗に終わってしまいました。

山くわが終わったあと、いつの間にか飯牟礼から大鬼はいなくなっていました。村の人たちに噂が広がりました。桜島の爆発に驚いたからでしょう。しかし、飯牟礼はそれから田畑がきれいになり、いろいろな作物がたくさんとれるようになりました。村人は大鬼に感謝しながら、楽しく豊かにすごしたそうです。

参考文献 © 伊集院町国語部会編 「伊集院の昔ばなし」